

秀賞

未来への希望に向かって 岩手県盛岡市立洪民中学校 2年 右京 桃子

母牛の呼吸が荒くなった。必死にいきもうとしている。もうすぐ子牛が産まれるのだ。

「ようし、引っぱるぞー。」

父の声に、少し離れた所から見ている私も緊張する。自分の心臓がどきどき高鳴っているのがはっきり分かる。子牛を引っぱるといっても、ただむやみにやっていいものではない。子牛の前足にロープをかけ、母牛がいきむタイミングに合わせなければならない。両親が母牛と呼吸を合わせる。啐啄同時（そったくどうじ）——。母牛と子牛、そして両親の呼吸が合って、ついに子牛が産まれる。やがて母牛が愛しそうに子牛をなめる。母乳を飲ませ、立ち上がるのを見守る。繁殖農家では当たり前のこの光景、生命の誕生の瞬間を感動とともに見つめながら私は、ある決意を新たにすのだ。「獣医師」になるという、未来の自分との約束。そう、私の将来の夢は、獣医師になることだ。

私の家は和牛の農家をしている。小さいときから牛と接してきたことが、獣医師になりたいという夢のきっかけであろう。

和牛の農家には、三つの種類がある。一つ目は「繁殖農家」だ。仕事の内容は、母牛に子牛を産ませ、子牛を9カ月くらいまで育てて、市場に出すこと。二つ目は「肥育農家」だ。仕事の内容は、市場で子牛を買ってから肉牛に育てることだ。繁殖農家と肥育農家が協力することで、人々は肉を食べることができている。三つ目は「一貫農家」だ。それは、繁殖から肥育まで、全てを一貫して行う農家のこと。私の家は繁殖農家だ。

牛の出産が大変なときや牛が体調を崩したとき、獣医さんを呼び、助けてもらう。小さいときからそれを見ていた私は、命を救うことのできる獣医さんを、カッコいいと思っていた。そして、そのあこがれは、将来の夢へとつながっていった。

しかし、「獣医師」と聞くと、男性の仕事と考える人が多い。実際、私も、「今日、獣医さんが来るよ。」と言われれば、男の人が来るものだと思っていた。獣医師に限らず、職業や役職が、男女いずれかに固定されてしまう傾向は、日本ではまだまだ根強いものがある。

今年の春、生れたばかりの子牛が、足をケガしてしまった。はじめは、すり傷だったので、自然に治るだろうと思っていた。だが何日か経ったら、ケガを

した足を地面につくことができなくなった。そこで、獣医さんに診ていただいたところ、傷口から悪い菌が入ってはれていると分かった。治療していただいたものの、ケガをしたところが腐っていき、骨を削りながら、蹄（ひづめ）の半分を切り落とすことになった。そのとき、大学の獣医の先生が来てくださったのだ。

その先生は女性だった。かっこいいなと思いつつも、珍しいとも思ってしまった。今の社会は、男性、女性にかかわらず平等になってきている。それなのに、私は、女性の獣医さんを珍しいと思ってしまったのだ。世の中の傾向とか、偏見とか、外の世界のことを言い訳にしてきたが、実は、私の中にこそ、「女性の獣医師は……。」という壁があったことに気づいた。確かに、犬や猫を扱う動物病院の獣医師に比べ、牛などの大きな動物を専門とする獣医師は男性が多く、女性は少ない。この割合の少なさの中で働くのは、きっと心細く大変だろう。しかし、その分、やり切ったときの楽しさ、達成感、やりがいはいっぱいはずだ。私の中で、ぼんやりとした夢が急にはっきりしたものに見えた。ただ「なりたい」ではなく、「なるために何をするか」というように、将来へとつながる道が見えると、行動も変わっていく。

私は今、さまざまなことに挑戦している。中でも獣医師になるために、積極的に家の仕事を手伝っている。夕飯作りは私の仕事。部活動や課外活動で疲れて帰る日もあるが、家族の一員として、いや、将来、責任ある仕事をするための練習だと思ってやっている。学校の勉強はもちろんだが、家庭学習もコツコツやる。何事も続けることが大切だと思うから。日々の生活の多くは、充実していて楽しい。けれど、心や体が疲れることだってある。そんなとき、私はこれまで見てきた両親の姿、生命の誕生、牛たちの姿を思い浮かべている。苦しくとも毎日、牛たちと向き合う両親。支える家族。懸命に生きようと立ち上がる牛たち。そして、獣医師の皆さん。みんな私の先生だ。そのあこがれを力に変えていけばいい。

いつか私は、あの大学の先生のような、かっこいい、誰しものあこがれとなる存在になる。獣医師として、一人の人間として、自分の足でしっかり立ち上がろう。生まれた牛たちのように。何度倒れても立ち上がるのだ。

今日もまた、朝早くから牛たちの世話が始まる。私ははりきって食事を作る。未来への希望に向かって。